



メジロ 枚岡梅園 2009,3,14

奈良学園3キャンパス（三郷、高田、登美ヶ丘）

# 自然通信 No9

2011、2、28（文責・©一短大：磯辺ゆう）

寒気の中にも日差しが暖かになって、梅の香りがただようこの頃です。

“梅一輪、一輪ほどのあたたかさ” 嵐雪

早春を彩る梅の花を、鳥も多くの人々も愛でてきました。

## \* 梅 \*



ウメ 高田 2010,2,28



ウメ 高田 2005,3,14

梅は中国原産で、いつの頃か渡来し、今では日本の暮らしに深く溶け込んでいます。中国では古来詩によく詠われてきました。日本では、日本書紀、古事記には記されず、懐風藻(751年成立)に見られる詩が記録としては梅の最古の詩といわれています。ただし、それより後に成立した万葉集に、730年(天平2年 奈良時代)正月13日大宰府の長官大伴旅人(おおとものたびと、家持の父)が自邸にて「梅花の宴」を催した時の歌32首が記録されています。こうした文献から、梅は藤原京時代頃の渡来か?といわれてきました。ところが、弥生遺跡から梅の木片や種子が発見されたことから、今では稲とともに渡来したと考えられるようになってきています。梅には様々な品種がありますが、種(しゅ)としてはウメ *Plunus mume* 1種です。シーボルトが持ち帰ったサンプルを元に記載されました。バラ科サクラ属に属し、アンズなどと近縁です。

中国では、寒中に緑なす松と竹に、花を咲かせる梅をあわせて「歳寒の三友」として愛でてきました。こうした考えがもたらされて、日本の正月に松竹梅を飾るようになったのかもしれませんが。松も竹\*も相当に古くから日本のものでしたが、正月かざりにするのは本来松で、そこに竹が参加し、最後に梅が参加したのは江戸時代のことです。今も、神社の正月かざりに松だけを立てているのを見ることがあります。

\*古くからあったのはマダケ、ハチクなどで、モウソウチクは遅く江戸時代に本土最初の記録があります。

## ・梅

### 大宰府の梅 (古くは「大」の字を使います)

先述の「梅花の宴」には、当時筑前の国守であった山上憶良(やまのうえのおくら)や大宰小弐小野老(おののおゆ)など万葉の有名歌人が集まっています。彼らにとって親しい長屋王の無念の死から約1年後のことでした。間もなく旅人の異母妹の歌人大伴坂上郎女(さかのうえのいらつめ)も大宰府に来ます。家持は当時少年で、大宰府でこうした文人たちと親しんでいます。

その約170年後、901年(平安時代)に菅原道真が大宰府に左遷されます。その際に歌った“東風吹かば匂いをこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れぞ”が大変有名です。梅は後に主を慕って大宰府に飛来したとされ、道真の墓跡につくられた太宰府天満宮正面右に神木「飛梅」として継承されています。



太宰府天満宮「飛梅」2011,2,15

### 梅に鶯

ウグイスは梅につきものとして、よく絵に描かれています。でも、実際に梅の花によくくる小鳥は一見ウグイスのように見える黄緑色のメジロです。メジロは蜜を吸い、寒い時期に花が咲く梅の花粉の媒介者として働いています。一方、ウグイスは薄茶色で昆虫を食べています。庭木に来ることもあります。メジロ程よく梅の花に来ている様子はありません。なぜ梅に鶯なのでしょう。

これは、春を待つ気持ちから、春を告げる目覚ましい花と鳥の声として、並び称されたものようです。実際に万葉の歌では、梅の花にどこからか聞こえる鶯の声という情景が中心です。それが平安時代になると、天皇の命で持ち去られる庭の梅に“勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へん”の歌を結ぶ紀貫之の娘の「鶯宿梅」の話が出てきます。こうして、いつか定型化し、梅に鶯がとまるようになったのでしょう。

なお、大和郡山城門前菊屋の名物城之口餅は、大和大納言豊臣秀長が兄秀吉をもてなした時の菊屋考案の餅で、秀吉は大満悦で鶯餅と名付けました。いつしか名が変わりましたが元祖鶯餅は本来の鶯らしく、黄緑色をしていません。

### 梅を食べる



ウメの実 高田 2010,5,14



梅干し 2011,2,27

なんといっても梅干しです。梅雨時に塩漬けし、土用の3日3晩の天干しによって梅干しができます。梅干しには、強力な有機酸による防腐・殺菌・疲労回復効果があり、おなかを壊したときに有用で、おにぎりや弁当にも活躍します。おかげで日本人にはなくてはならない食品となっています。関西では、薬用効果のある赤紫蘇の葉を加えて、赤く染めるのが主流です。これは、梅の酸に紫蘇のアントシアン色素が反応して発色するものです。

### 主な参考図書・文献

大森志郎・桜井満・本田正次・松田修(1972) 松竹梅-日本人の美と心 社会思想社現代教養文庫. 宮地たか(1995) 天平の女 勉誠社. 有岡利幸(2005) 資料日本植物文化誌 八坂書房. 増田和夫(2006) 自分で採れる薬になる植物図鑑. 柏書房. 大橋弘一(2008) 庭で楽しむ野鳥の本 山と溪谷社. 桜井満(2008) 花の民俗学 講談社学術文庫. 菊屋しおり 名物城之口餅由来.